鹿児嶋戦記
第八
篠田久一郎編
加賀吉版

篠田仙果錄
永島孟齋畫

繪本鹿兒島戰記

東京書肆
青盛堂版

支へる暴徒をとうちやぶり高橋迫

押つめ

何其おやまつて日

日夜あたり左りをとうち六人ばかり切つて捨雑兵共を奪ひ人をその勢

ひふ

野津少將

日野家旗を奪ひ

けらを野津少將

全く賊どもの

その小ぜい

敵中へ走せ入りたり

鹿兒しま勢こゝを

見てソレ

大勢もとうち

とるやこと

八方より切つくるを

指令のサーベル閃めき

馬と引き

陣へもと

られ〳〵の實は

けん物を

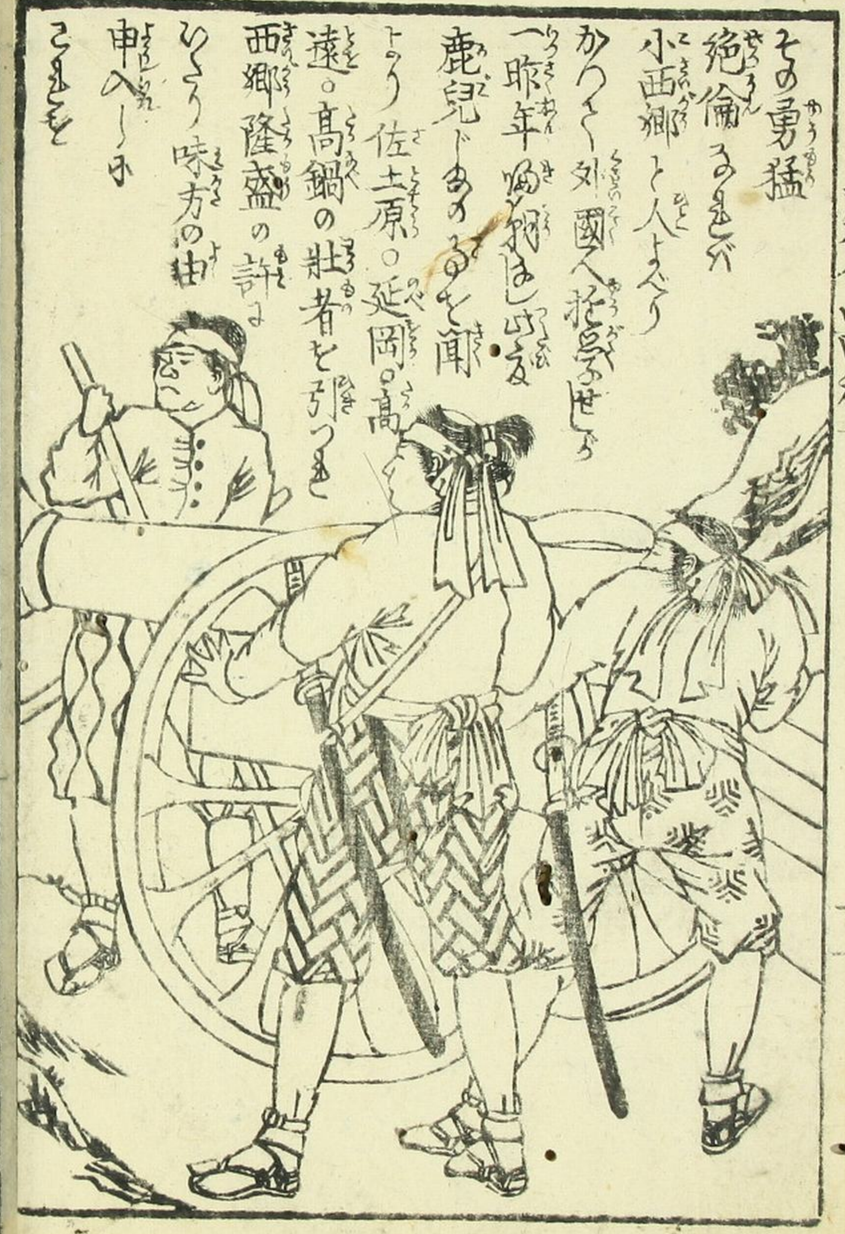
ふ者も有

ざるを

鹿兒島人
暴発せしが
敗散
の後
のがれ
日
嘉
西郷の
川尻へ出張
名と云しせんが爲め

田村啓次郎
先陣
奮戰
車
官軍
旧佐原
の藩知事
島津某の三男

その勇猛
絶倫なるべし
小西郷と人よびて
かつて外國へ旅行せし
一昨年鳥羽伏見の
鹿兒島なるを聞
ようう佐土原○延岡○高
遠○高鍋の壯者を引つれ
西郷隆盛の許へ
ひきゐ味方の由
申へしと
こゝもを



ゆるさ
ずして
我が別隊
とゝのひ
働くに
と日向佐土原人乱入ゆ
及ぶ〳〵とぞ○三月二日
山鹿口南の関とゝゆ
戦ひを寄せ拐敗
決せずして分もてゝ同三日
熊本城を圍んでゝる
篠原國幹

暴徒どもかせめ
あぐみ花岡山

大砲を
発せしゆ
二三發うち
込でゝ城中いとも
無異なれば

熊本城

攻ぬき雑賀さを〳〵けん押えの兵をと
弾〳〵の三七の永八精兵五百余を率〳〵
ゑの瀬口へ攻寄せ〳〵大久保村より暮坂を
越〳〵本留村をも跡しとは吉沼峠を
さ〳〵かくるこゝろ勢人数張せ〳〵
官軍の所候の者ゞ注進を

平倉村よりぞろ〳〵と
暴徒のよせくると待
やどゝ早る近く
来りてゝ狭地を
うちつゝみたり
篠原國幹
おりつゝ
熊本城を
抜ぎ〳〵て今やと歌を
破〳〵ぐるゝ人ゞ面いおのけぞ〳〵
のと烈〳〵〳〵今を下〳〵進め〳〵〳〵と
一筋ゞ鹿兒島日頃ゞ倍〳〵雑野と

篠原國幹

敵を攻撃くるまれども
官軍地の理よりけもの
木のかげとうり狙ひ
撃ちあぐ暴徒も進めず
牧線あぐ暴徒は篠原の大砲
せるを立腹
利
支
天の
荒くる如く
八支馬を
せらと

のさまを馬とう
落るを暴徒ハ
ちまち〳〵肩を公を

勅使柳原公

篠原國

日
敵
篠
逃
急所の

日吉治越の
翌と滑くう

○朝廷より
柳原議官を
遣

鹿兒島縣廳
壹里

明治十年三月廿四日
鹿兒島四幕下

勅使として黒田公
川路公その余
諸官員を
副られ軍艦
四隻敷氣船
五隻兵士
一大隊巡査
千二百人

西郷隆盛

これを
守護し
三月八日
長崎へ

同道して西京せられ黒田参
議かあとを殺り
同所の彈藥
製造所をとりこと
所をとりこわしけり
○さて又西郷
隆盛か川尻を
本陣とさだめ
暴徒の内八百人を
撰出し直隊と
し自身をさせ
我ひの徒をも聞

暫せられ
十日鹿兒島へ
入港され上陸
ありて島津久光公
父子へ
勅命を
伝へられ
先
ざるを
暴徒の
らめか
捕縛されて
入牢とあり
中原氏

馬はあるもあり又基をうつも
待をつつ
温泉に
拵ひ
軍事を
ゆるせ
日あり
村田三助篠原國幹のうち
死をきく大ひに歎き

かの
こうとぞ
○三月
十二日
田原坂川
尻の南の関
谷にかゝりあり
同十三日豊後
路へ出張せり
薩言視隊の人々は
大雪のため大ひに
難苦いたされしこと

激〳〵
戦ひ
十五日は昨日ゆ
増〳〵奮戦
官軍数
刺殺及び
四五日の
敵味方
死傷の者あり〳〵
十六日山鹿口なる

十四日は早朝より田原坂の
官軍は暴徒の墓
場側面より
うち破らん
と砲発
勢いゆゝぶ
らるゝ
防戦ひ力を
尽し〳〵土佐一ト重の
内外より抜刀隊は
あのぎをけづり砲兵は
うち合ひ突合るもこれ

岩村の官軍は長
野原外あまのゝ輜
重〳〵坂ゆき暴徒
と数
刺殺
たゝかひ
十七日
十八日

田原坂より
炮戰せり
さて十九日
早朝より
降出せ
雨の泥濘を
たゝう官軍
不意ふか〳〵
よせんと
其支度よ
及びける

鹿兒島戰記四篇下卷終

柳伊朋彩子年四月廿七日

010190510420

吉田愛